

高松凌雲訳“保嬰新書 舌帶之説の章”について

福本 雅文, 池田 貴裕, 田中 晃伸

茨城県鹿嶋市 タナカ歯科

高松凌雲は周知の通り幕末から明治にかけて活躍した久留米藩古飯出身の医師である。

高松虎之助の三男に生まれ、22歳の時に江戸に出て、石川桜所に入門し、後に緒方洪庵の適塾にも入塾している。

1867年パリ万博に日本代表団の徳川昭武の随行員として渡仏したことをきっかけに、パリのHOTEL-DIEUにて医学研修を行っていたが、本国における戊辰戦争勃発を機に帰国し、旧幕府軍の医師として参戦している。

箱館戦において敵味方の区別なく戦争負傷者の治療を行ったことは有名であり、その博愛思想は後の日赤創立にも影響を与えている。

また、フランスからの帰国の際には、最新の医療器具及び医学書等を多数購入している。

今回、高松凌雲が明治9年(1876年)に翻訳出版をした「保嬰新書」のうち口腔外科領域に関わる舌帯之説の章について報告したい。

なお、この書の原本はベルギーの医学博士セルウエス氏が1863年に出版したものである。

「保嬰新書」は現在国立国会図書館、早稲田大学図書館などに保存されているが、演者達は福岡県小郡市古飯にある高松凌雲生誕地の高松家を訪問した際に、原本を複写したものを拝見し参考とさせていただいた。

「保嬰新書」は上下2巻で構成されており、“舌帯之説”は上巻において25行(1行20文字)に渡って書かれている。

その内容を以下に抜粋する。

舌帯展延して上は舌尖に接続し、下は歯茎に固着する者、往々之あり。故に注意せざる可からず。然る時は、其児、吸乳に方りて乳頭を上顎に押すのみにして、自在に吸うこと能はず。且成長後に至りて言語清爽ならざるの患あり。展延せる舌帯を切断するに、動脈及び静脈に触るれば危篤の出血を發すべしと雖ども、謹慎して之を施す時は、其術容易なり。其法は左手の食指を嬰兒の口中に挿み、口を開き舌を擡げ舌帯を張り、而して右手に曲鋏を取て、之を切るべし。然る時は一滴も出血することなく、且痛を覚ふることなくして、舌は直に動て乳を吸ふこと、容易なり。但此手術は必ず医に委任すべし。介婦或は産婆等、之を粗忽に切断すれば、往々危難の出血を發することあり。恐れざる可からず。

以上これらの内容は、現在における舌強直症又は舌小帯短縮症もしくは舌癒着症に対する手術法を著したものであるが、手術に際しての解剖的な留意点や、手術者の資格に関しても記されていることは大変興味深い。

この“舌帯之説”は上巻の第1章“懐妊之説”から始まる6番目に位置しており、第4章“出産之説”第5章“出生後之注意”に続き記載されていることから、出産直後の注意点及び施術の対象となったものと推察できる。

なお、発表にあたり本原稿の解説・解釈及び現代文置換に関しては、茨城県清真学園高等学校教諭釜田啓一氏の協力を得たものであり、ここに氏に対し感謝の意を表す。